

遠見番所・御台場

～異国船の渡来に備えた遠見番所 御台場づくり～

幕末になると鎖国を続けていた日本に、開国を求めて異国船がやって来るようになります。開国が攘夷かで揺れ動くなかで、幕府ははっきりした方針を出し得ないまま、ただ異国船接近に対しては警戒を強めるよう指示していたので、玄界灘に面した唐津藩としては容易ではなかったようです。

安政2年(1855)7月18日、ロシアの軍艦が1艘神集島沖に来航という報せが、神集島と相賀の庄屋より佐志組大庄屋のもとへ届きました。大庄屋は直ちに相賀まで出向き確かめた上でお城へ報告しました。お城では家老の陣頭指揮のもとに、甲冑(かっちゅう)や火事装束で身を固めた250人余の藩士達が、村々からかり出された300人余の人足と共に、湊や呼子まで出かけて警戒にあたりました。18日昼頃には、黒船が4、5艘、加唐島・馬渡島沖を航行中との知らせがあり緊張しましたが、その後何事もなく23日には警戒にあたった武士達は引きあげました。

このようなことがたび重なり、幕府は沿岸の諸藩に遠見番所の整備を急がせました。唐津藩の遠見番所は、神集島・馬渡島・黒塩村・杉野浦・星賀村・納所村・串村・小友浦・相賀村・名護屋村・名護屋古城・呼子浦・加唐島・向島の14カ所に置かれました。遠見番所のある村では、庄屋を中心に村人が1日に2人ずつ交代で見張り番を勤めました。異国船が見えた時は急いでのろしをあげて知らせました。そのため遠見番所には、のろしをあげるための枯(かれ)薪(たきぎ)50束を常に用意していました。

肥前町納所(のうさ)には、遠見番所跡が公園として復元されています。異国船の渡来が頻繁(ひんぱん)になると、海岸防備のための御台場建設が幕府の命令で実施されています。唐津藩では安政2年(1855)6月から7月にかけて、沿岸に御台場をつくるための大規模な調査を行いました。その時の様子を記した「御台場御見分記」によれば、御用人中沢努、郡代松沢権左衛門はじめ27人の藩士と20数名の人足、総勢50名余で、高島・佐志・相賀・神集島・呼子・馬渡島・波戸・名護屋等19箇所を見分してまわり、16個所に御台場を建設しました。しかし台場は文字通りの台場だけで大砲は設置されませんでした。

庄屋達が「異国船渡来等の有事の際、村人が不安がらないような手立てをしてほしい」と願ったのに対して、藩側が回答した古文書がありますので、いくつか要約して紹介します。

- ・異国船渡来等の際には、城内で早鐘を鳴らすので、城下の寺院は釣鐘や半鐘等で受け継ぎ、遠い村まで届くようにすること。従って寺の鐘は時の鐘以外は火事の場合でも鳴らしてはいけない。村々で半鐘を打ち鳴らし、非常を知らせるのはかまわない。
- ・非常の時、農民の妻子達が慌てないように、逃げ場所は村々であらかじめ決めておくこと。差し当たりの食糧は準備をする。
- ・出陣に人夫としてお供した農民達の田畑は、荒れ放題にならないように、村中で助け合って耕すこと。出陣した人夫が万一怪我や死亡した場合は、残された家族には相応の救済をするので、そのあたりは庄屋達がしっかりと申し聞かせるように・・・。

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



遠見番所公園

(山田洋氏より)

◎引用・参考文献(出典)

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html